

## 100 周年記念寄稿

## 上智経済論集 100 周年特別号を記念して

上智大学 名誉教授  
田 中 利 見

「100 周年特別号」の刊行をお祝申し上げます。私が上智大学経済学部採用されたのは昭和 62 年 (1987) 4 月 1 日で、退職したのが平成 21 年 (2009) 3 月 31 日です。22 年間奉職したことになります。正直言って私には特に後半は経済が不況で時間的に長く感じました。

上智に来て好感を持ったのは、他のマスプロ大学と比較してカトリックの大学らしく教職員同士、教師と学生、学生同士の関係も近くアイデンティティのある学校になっている点でした。だが他方で、経済学部の学生に関してはややブランドに甘えて学問への取り組み、知的好奇心が希薄で潜在的能力を十分に生かしきっていないのではないかと察しました。そのためには特にゼミでの専門教育充実の必要性を痛感しましたが、それどころか、自分こそ上智大に相応しい教員としてこれからやっていけるかと緊張したことを覚えています。

そんな矢先、当時の故内野学部長から勤務 1 年目の慣習として『論集』に論文を寄稿するようにと指示があった。論文は「我が国における通信販売の将来性」にした。まだ通信販売と言えばトラブルだらけの日陰の商売であったが米国では 19 世紀初頭から鉄道発展とともに農村部を中心にダイレクトメール、カタログが普及してきた。その後、第 2 次大戦後は店舗販売に押されて停滞していたが、80 年代になると都市の働く女性を中心とした客層と新しいライフスタイル提案の洗練されたカタログやテレビショッピング、電話とコンピュータの連動などの革新的な媒体の登場で再び急成長をし始めていた。その後の通信販売産業はご存知のようにインターネット通販を典型に奇跡的発展を遂げた。

この『論集』への寄稿を切掛けに当時の通産省の政策の下にダイレクトマーケティング産業界の組織づくり、研究、人材教育、消費者問題への対応等に学者として先鞭を付け、些かでも産業発展に貢献できたのは幸運であった。

当時、『論集』は故内野前学部長が 75 周年記念号に熱心に取り組まれていた。新人の教員であった私にとっては、毎号の掲載論文は普段ゆっくりとお話を聞く事ができない同僚の先生の研究を知る事ができ興味深かった。

勤務の当初はいわゆるバブル経済の絶頂期であったが、中盤には破綻し、さらにリーマンショックが追い打ちをかけると、その後社会も学生も萎縮して学業よりも就職しか関心が無くなってしまったが、大学学部においては 100 周年の記念事業で改革の機運ができた。

この間、幸い旧安田火災海上保険(株)より2000年から2カ年の寄付金を頂き、講座の充実や学部の副読本を作成し、学部予算の足しにする事ができた。

また、個人的には何よりも本学での研究生生活を満身に終える事ができたのは学院の先輩同僚に負う事が大きいと感謝している。特に亡くなられた内野前学部長の経済観、坂本先生の国際経営の話、滝沢先生やダウニィ神父の国際経済、同期着任の漆先生の医療経済の話など面白く、今でも時々夢にでてくる。

最後に、経済学経営学のような実践的学問における研究教育は、これまで以上にアカデミズムに閉じこもることなく、グローバルな民衆のエネルギーを吸収し多様な問題の山積する現場で問題解決にあたるべき時代に来ている。

上智大学はその点において最もふさわしい大学の一つとして評価されている。そのためには、世界の研究者と本学の若手研究者の議論の場として『論集』が果たすべき役割に大きな期待を寄せているのは私ひとりだけではあるまい。